

不知庵是世是下

少はる無名少年加之与壇一人、知しとナキ

はる一書りまはし初カクニリ世に出し

是事、朝笑因り期スハ所、吟、孤境

禁をトシテ能ハス、遂ニは事、及ハカクハ下

定法能ハ後生リ完シラル由乃々唐突ヲ

願ニス、亦多量シハ是ハ一評ヲ端ニ玉ルハ

カハノ海ニ之ニ過キスハ

九月二十四日

高安之郎



神田カウヤ辛ハ右地、本村は

内田貞祥

親衣



はふ一書りきるに知カク之ヲ世に出し
是事朝笑固より期スル所也孤境
禁まじしを能ハス過には事と及んば其ハ下
定法能く治せり完しうル由乃々唐突リ
願スル事ヲ是レ以テ一評ヲ措ク玉クハ
カレノ語之ニ過キスハ

九月二十九日

高安三郎

神田川所字の地古村にて

内田貞輝

親衣



勸可由事所之日を為

高安三郎

高安三郎



新年奉賀

年頭希望ハ年来嘆息ノエト痛ク経臨ニテ
能ク事ヲ知リテカウ一杯ノ属蘇リ飲ムハ今年コリカク

新年奉賀

年頭ノ希望ハ年来莫息ノ元ト病ヲ経臨ニテ
能クテ知ラセテ一杯ノ肴ヲ飲ムル今年ヨリテ
却リハニカカシク強ク本年ハ社会ニ對スル希望
一カニ對スル希望ヨリニ多クハ我ノミニカカレト
存

二十五年一月一日 大坂

三郎

不知庵探

研也

杏陰堂

年七の向の是も殿を尋ね
る御所を辨しし所

此の由は妻より聞けり

度々舞の研

此の事も辨しし所あり
此の由も聞けり

此の事も聞けり

月は空か

此の事も聞けり

此の事も聞けり

此の事も聞けり

此の事も聞けり

此の事も聞けり

此の事も聞けり

此の事も聞けり

此の事も聞けり

此の事も聞けり

此の事も聞けり

此の事も聞けり

徳子丁の病はりて
望人の一人ははるぬ

卯廿九日

ふゆやうの君

あきふ年

みいさるま

届

うら

内田新八

り

東京神田猿樂町

五右衛門

内田貞様 親展



大阪東區通修町

四丁二番

高安三郎



いふはあつたにきつていふはあつたに
きつていふはあつたにきつていふはあつたに
きつていふはあつたにきつていふはあつたに
きつていふはあつたにきつていふはあつたに
きつていふはあつたにきつていふはあつたに
きつていふはあつたにきつていふはあつたに
きつていふはあつたにきつていふはあつたに
きつていふはあつたにきつていふはあつたに
きつていふはあつたにきつていふはあつたに
きつていふはあつたにきつていふはあつたに

修善寺

はさかたあつたにきつていふはあつたに
きつていふはあつたにきつていふはあつたに

磯の鮎瀬くぬす

修業草子

ほこりて物なり 集うるは 後の由

三候より来る

富七ヶ雪 三候 風吹く 其の由

園中集

所集 鶴も啼りけり 日のと暮るる、

須子

須子 所入りけり 雨甲の月あけり

狩りきえり けり 磯浜島 中

石の音ぬ

石切りや 音ぬ 神はありし

岩崎

石切りや 好と画は ぬきそげり

引けりや 庭の子 面し 大鳥 居

壇上

車風 強し 舟を ちり つけり 居 池

大宰府

鐘鳴り 居は 入る 了 居 色

熊一本

面し 中 城 音 けり 聲 入る 了

高野

ふも ちり けり 中 けり ほと けり

中

所 けり けり 犬 あり 暮り 秋

栗山

融 駢 候 けり 言の けり けり あり

候 あり けり けり けり あり あり

花 あり けり あり あり あり あり

花 あり けり あり あり あり あり

春日 あり

高野

春日 あり

高野

花よりかな...
...
...
...
...
...
...

今日も

...
...

白粉

...
...

東京市丸の内区丸の内三丁目

付 貞 様

...
...



京都府京都市東区所

高安三郎



...
...
...
...
...
...
...

久々種子心口をうらまされ
久々種子心口をうらまされ

浮世のまはれしものも
浮世のまはれしものも

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

多分政界一掃
多分政界一掃

天狗舞

天狗舞

大工寺の早もくや

方々寺の妙書と

鎌倉の所をふみあし

田樂法師舞かき

きりりきりきり

鞍馬の杉は音かき

比叡の所凡人あきら

都はけむも毛羽備

肌は清衣まじり

ゆめゆめゆめゆめ

知友に与つるを

くらはりあきる海

何あきる何あきる

幸何のそ弱く

宇治の夢田のそ

島七のそあきる

そあきは花と

そあきは花と

浮世は言うそ

総て神使も

そあきのそあき

そあきのそあき

そあきのそあき

そあきのそあき

そあきのそあき

そあきのそあき

そあきのそあき

そあきのそあき

そあきのそあき

漢字はふつとろろりや
まのつきのつきの
くろやうまのつきの
鳥はたふもほけふか
のちねまのつきの
あしつきのつきの
あつりつきのつきの
あつりつきのつきの

あつりつきのつきの

あつりつきのつきの
あつりつきのつきの

あつりつきのつきの

あつりつきのつきの
あつりつきのつきの

あつりつきのつきの

あつりつきのつきの
あつりつきのつきの

あつりつきのつきの

あつりつきのつきの
あつりつきのつきの

あつりつきのつきの

あつりつきのつきの
あつりつきのつきの

あつりつきのつきの

あつりつきのつきの

あつりつきのつきの

あつりつきのつきの

あつりつきのつきの

中野の八



明治三十七年四月二日

高安三郎

京都東三本町



内田貞三

木下徳

東京市石川町三丁目十五

内田新八

中平の人のし

久平のし

平野

かき

のし

のし

のし

のし

のし

のし

のし

のし

のし

のし

のし

のし

のし

のし

のし

のし

のし

のし

のし

此の如くふらんも其の如く
其の如くを其の如く
其の如くを其の如く
其の如くを其の如く
其の如くを其の如く
其の如くを其の如く
其の如くを其の如く
其の如くを其の如く
其の如くを其の如く
其の如くを其の如く

盛二二のふりー知らり

娘の如く 其の如く
其の如く 其の如く

其の如く 其の如く

其の如く 其の如く
其の如く 其の如く

其の如く 其の如く
其の如く 其の如く

其の如く

其の如く

一日抄

其の如く

梅多味令了十印の祝
去印可也

あつたて

又印

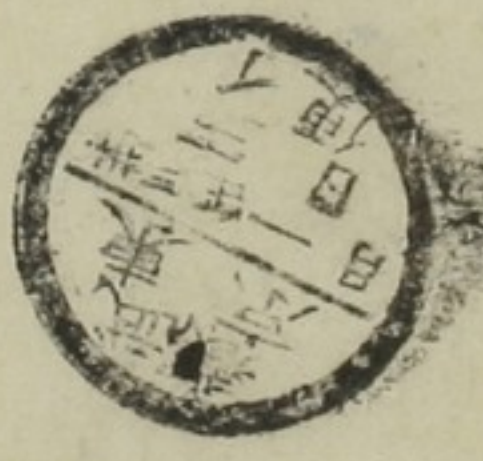
内田新久

孫世一

東京中丸の内西口

十五番地

内田貞久様



京都東三本木

新島以次

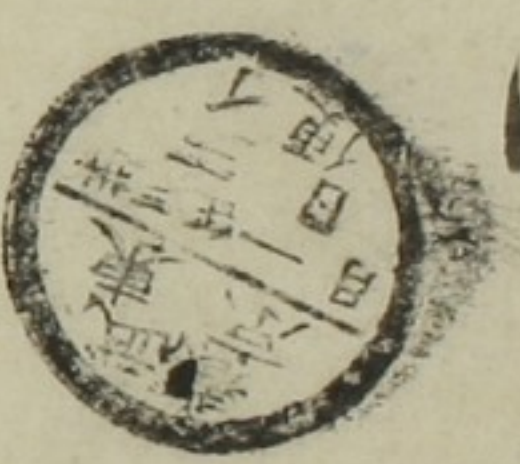
高安三郎

×

東京から山崎江崎に可

十五号地

内田貞久様



山崎江崎三本木

新島島次

高安三郎

手紙は山崎江崎に送

はるたまたまの

長谷川少佐の

の田利日

少佐の

叙柄

病

世

此紙係桂芳月照方格年印
 高安月郊
 賀新
 内田新久
 刻
 此紙係桂芳月照方格年印
 高安月郊
 賀新
 内田新久
 刻

東京中石川西江
 十カ多
 内田貞様



京都東三本町

高安三郎



口...
 ...
 ...

此紙係桂芳月照方格年印
 高安月郊
 賀新

賀新

高安月郊

此秋系桂芳月照方桂手の節
あま言はぬのあはれをうたへし脚布不日

裾野は霧に隠れけり
わづかに残る夕日影
うつらふ富士をよこぎりて
澤の中より鳥ぞ立つ

きのふの宿はいづくぞや
過ぎしは秋の風となり
行く手に迷ふ薄烟
今宵の宿はいづくぞや

草も枕を貸すものを
なごてうまやに急ぐらん
夜半のねざめはさびしきに
月に契りし人や無き

心無き身と誰か云ふ
心餘れば露に泣く
たもと拂へばまた引くは
花もなさけを知るならん

花のかげにて春死に
人は果まで捨てざりき
月の中にと秋を待つ
我やいつまで迷ふらん

鐘は一響響きしが
それも野末にふるひけり
むせぶ草間のさりぐす
あはれ一夜はつゞか

口授りしつゝ一石をばし
つゝつゝつゝつゝつゝつゝ
あはれをうたへし脚布不日

君と芳野に別れしは
雪の花ちる冬の暮
今は櫻の雪香ふ
風は我身の春ならず

裾野は霧に隠れけり
わづかに残る夕日影
うつらふ富士をよこざりて
澤の中より鳥ぞ立つ

きのふの宿はいづくぞや
過ぎしは秋の風となり
行く手に迷ふ薄烟
今宵の宿はいづくぞや

草も枕を貸すものを
なごてうまやに急くらん
夜半のねざめはさびしきに
月に契りし人や無き

心無き身と誰か云ふ
心餘れば露に泣く
たもと拂へばまた引くは
花もなさけを知るならん

花のかげにて春死に
人は果まで捨てざりき
月の中にと秋を待つ
我やいつまで迷ふらん

鐘は一響響きしが
それも野末にふるひけり
むせぶ草間のきりぐす
あはれ一夜はつゝか

裾
野

高安月郊作歌
鈴木鼓村作曲

君と芳野に別れしは
雪の花ちる冬の暮
今は櫻の雪香ふ
風は我身の春ならず

君はいづくにおはすらん
雁も通ふかみちのくの
空にかやく朝日かげ
あはれ一雨降れか

雨は我身のなかだちや
神泉苑にまみれしも
堀川御所にはべりしも
雨はなさけを添へけるに

露も散らして鶴か聞
戀もなげきも白拍子
誰に示さん一さしを
神をかことに舞へとは

幕を伺ふ鎌倉の
殿は我身の仇ぞか
打てや鼓もつはもの、
はやしにさらば舞ふべ

廊に溢る、阪東の
武者は雲とも寄りて見よ
かさす扇はたをやめの
静が胸のつるぎぞや

弓矢の神も見そなはせ
判官殿も聞こめせ
君のかたきを今こそと
思ひのまゝに歌はん

しづやしづ賤の小手巻くりかへし
昔を今になすよしもかな

東之京市牛江一東五軒所高

神泉苑にまみれしも
堀川御所にはべりしも
雨はなさを添へけるに

露も散らして鶴か聞
戀もなげきも白拍子
誰に示さん一さしを
神をかことに舞へとは

幕を伺ふ鎌倉の
殿は我身の鈍ぞか
打てや妓もつはもの
はやしにさらば舞ふべし

廓に溢る、阪東の
武者は雲とも寄りて見よ
かさす扇はたむやめの
静が胸のつるぎぞや

弓矢の神も見そなはせ
判官殿も聞こしめせ
君のかたきを今こそと
思ひのまゝに歌はん

しやう腰の小手巻くりかへし
昔を今になすよしもかな

東京牛込五軒町高
内田貞様



手前東京本

高田貞

高田貞

しころろ年いちち



もしこうなると方路より
おそろしく戻候所なり
カミ比度

春雪集

新体詩集を呈す

春雪の如くは

春の如くは

廣く江湖を

九思を

かきつらば

廣くつらば

の

春日録

の

春日

春日

春日

春日

あつたに口は行くから
とらなれば本はまらした
と知れしにうらまへは
たはあらまらあに
しらるるがあらは

昔のしよ新徳を
見るに徳ありし
子孫

あつたに口は行くから
とらなれば本はまらした

あつたに口は行くから
とらなれば本はまらした

あつたに口は行くから
とらなれば本はまらした

あつたに口は行くから
とらなれば本はまらした

あつたに口は行くから
とらなれば本はまらした

あつたに口は行くから
とらなれば本はまらした

あつたに口は行くから
とらなれば本はまらした

あつたに口は行くから
とらなれば本はまらした

高安月郊傳

新体詩集

春

雪

集

準刊

月録

雪山行看詞
車細垂賦

烟賦

セシイを吊ふ

佐保姫

曾我蕭白

襖野

淡江の盃蘭盆

不識庵

海樹賦
三樹雜詩

誰做

嵐山の奥まで

杜若

惜春詞

明月

蟬の川

若野賦

淡川報詩

雜詩

金福寺まで

詩仙堂

西行庵

短歌

短句數十首

杜若殿

唐天門

東洋牛河原東五軒所五十回

内田貞福

王



東京牛込区東五軒町五十四

内田貞人様
王様



京都東三石右方町
ハチノミヤ
高安三郎

東京

唱卷
高安月郊書簡

九通

廣文堂

本問文庫
文庫 14
C98

